

氏 名	小島 秀信
学位の種類	博士（経済学）
学位記番号	第 5656 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項
学位論文名	エドモンド・バークの政治経済思想 ―文明社会の思想的擁護の一類型―
論文審査委員	主 査 教 授 佐藤 光 副 査 教 授 中村 健吾 副 査 准教授 白銀 久紀

論文内容の要旨

エドモンド・バークは、フランス革命という中世的な階層制秩序の崩壊状況に直面して、それらに反対した保守主義の定礎者として高名な、政治哲学者にして実的な政治家である。しかし、フランス革命という社会構造の大変革期において、何ゆえバークは中世的な階層制秩序を擁護しようとしていたのか、そして、その階層制秩序の擁護論がバークの自由主義経済思想と如何に結び付いていたのか、という点については、バーク研究の最重要論点であるにもかかわらず、いまだ意見の一致を見えない。

本稿は、基本的にこの論点を扱うものである。第一章、第二章において、プライスら急進派との論争を通じてバークの階層制秩序擁護論の内実を明らかにし、バークの君主制、貴族制の擁護が合理的な理由に裏付けられていたことを示す。そして、第三章において、第一階級や第二階級の擁護＝宗教や騎士道の精神の擁護が、急進的な資本主義の平準化圧力に抗して、民衆の自発的服従を求めるイデオロギー的な一側面を有するものであったことを指摘した。無論、資本主義による階級の急進的平準化に反対することと資本主義の勃興そのものに反対することとはイコールではない、ということはいうまでもないが、ここにはバークの冷徹なホイッグ支配体制の擁護という動機があったことは否めない。ただ、留意しておかねばならないことは、民衆に服従を求める統治者の側にも、騎士道と宗教の精神はその地位に相応しい高い徳を要求するものであったということである。統治者階級が民衆に対して優位に立つとしても、「より善き本性が支配すべきであれば、人々の上に位置付けられた人間は…可能な限りの完徳に近づくべきである」と述べたのもバークである。騎士道と宗教の精神は、自己否定を自己肯定とする人倫的なエートスであり、貴族や聖職者ら統治者階級が第一に体得せねばならない「高貴なる者の義務 (noblesse oblige)」の淵源の一つでもあった。騎士道によって「安価な国防」が失われると論じたバークは、明らかに名誉をかけて祖国を守る、命を賭した騎士道の気概を貴族に求めていたし、地代などの「収入の一部を慈善のための信託物」だと考えねばならないとして、聖職者や地主貴族に貧民救済の義務を課していた。また、「疑いなく、貧民に対する慈善は、全キリスト教徒に負わされた直接の不可避の義務である」と述べて、弱者のために奉仕することに誇りを感じるキリスト教精神によって、小さな政府＝自由主義経済と両立する形で、社会的セーフティネットの構築がなされることを期待していた。しかも、名誉のために戦う、貧民のために奉仕する等々といった自己犠牲の精神が同時に自己を肯定する精神であったという点がこれらの議論の重要なポイントなのであり、その人倫的な精神の基盤こそ、騎士道とキリスト教の精神なのであった。当然、それは政府の役割を大きく各人の自発性に委ねることに繋がり、バークの経済的自由主義の大前提でもあった。ここに経済的自由主義と封建的精神が結合したバークの精神構造を読み解く鍵があると思われる。

補論において展開しているが、バークの伝統文化重視の経済思想の今日的意義を考える際、ハイエクの伝統主義的市場主義との比較は大変興味深いものである。ハイエクはバーク主義者を自任していたが、バークが伝統文化を重視し、変わってはならない文化的価値を措定していたのに対して、ハイエクの社会経済思想は、同じく伝統文化を重視していたものの、その伝統文化的価値が市場環境の変遷に適応して、変化していくことを大幅に認容していたがために、市場化に対する批判的視座を持ち難いものとなっていた。市場によって変化させられてはならない田園などの価値を措定したバークの思想は、景観保存問題を考える上で重要な視座を与えてくれるものとなろう。

バークの伝統文化重視の自由経済思想は、経済思想史において特異な地位を占めようが、いまだ豊穡

な思想的可能性を秘めていると思われるのである。

論文審査の結果の要旨

いずれの章も、『フランス革命の省察』をはじめとするバークのほぼ全著作を読解し、アリストテレス、アーレント、キャナバン、ハイエク、ヒューム、ケインズ、クラムニック、マックファーソン、ペイン、ポーコック、シュトラウス、スミス、岸本広司、中澤信彦の仕事など、欧米古今の古典、最近の内外のバーク研究などを広く渉猟した上で書かれたものであり、学説・思想史研究者の最低限の条件を十分に満たしている。もちろん、バークの著作をはじめ、文献の参照は、原則として原語（英語）で手堅く行なわれている。

内容に関して言えば、特に第3章において、バークが文明社会を構築し近代社会を発展させるエートスとして、宗教（キリスト教）、騎士道、親愛を取り上げたことに注目し、その含意を深めた点は、ポーコック・テーゼがそれほど我が国では知られておらず、宗教や騎士道などが社会の近代化を妨げる封建的要素としてのみ捉えられる傾向が強いだけに新鮮な印象を与える。

ポーコックの狙いは、宗教や騎士道などの封建思想を否定した上に展開されたヨーロッパ大陸型とは異なる近代化の様式が、近世のスコットランドやイングランドに存在したことを示すことであり、そのテーゼを検討することの意義はきわめて大きい。

ポーコックを超える結論が得られたわけではないとは言え、20点にも上るバークの著作と、総計140点にも上る関連文献を渉猟し、自ら考え、自ら文献を渉猟して有意味な結論に至った点は高く評価されなければならない。

また、本論文が、秀でた文章力と論文構合力、読者の想像力と思考を喚起する問題提起能力などの点でも優れたものであることも間違いない。

ちなみに、本論文の第2章、第3章、補論は、水準の高い学術誌に掲載された査読付論文を基にしたものであり、学界での評価も高い。特に、補論の基礎となった論文は、経済社会学会から若手研究者に与えられる高田保馬奨励賞（2008年）の荣誉に輝いている。

これらの点から言って、本論文は、博士号に十分値すると判断される。